美術工芸品

嵯峨・薬師寺　木造地蔵菩薩半跏像

山下　絵美

はじめに

京都市右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町に位置する薬師寺には，「生六道地蔵」の名で知られる木造地蔵菩薩半跏像（以下，本像）［図１］が本堂脇壇に安置される。本像は，昭和60年（1985）に京都市有形文化財（美術工芸品－彫刻）に指定され，翌61年度，財団法人美術院（当時）により保存修理が実施された。修理前，本像には矧ぎ目の緩み，材の朽損の進行，不適合な後補材の使用などが見られたことから解体修理が行われ，それにより，像内各所にのこる銘記が確認・記録された。

令和２年度で発足50周年を迎えた京都市文化財保護課では，同３年１月22日から３月７日まで，京都市歴史資料館にて特別展「京都市指定の文化財」を開催し，各所有者ご協力のもと，近年指定された美術工芸品を中心に全13件を展示した。うち本像は，当時の修理成果を公表する初の機会となった。

本稿は，本展を契機に改めて着目された本像と当時の修理成果を，所有者および修理施工者ご理解・ご協力のもと公表することで，本像の信仰史ならびに彫刻史的研究に資することを目的とする。まず本像の伝来を述べたうえで，修理時に得た基礎データと損傷状況・修理仕様・銘記・記録写真・修理図解を掲載し，銘記については翻刻を行い，若干の解釈を加える。

１．薬師寺と福正寺について

薬師寺は，龍幡山と号する浄土宗知恩院派の寺院である。もとは真言宗大覚寺派に属していたとされる。嵯峨天皇にゆかりの深い，本尊の木造薬師如来坐像[1]をはじめ，木造阿弥陀如来坐像（鎌倉時代・京都

図１　木造地蔵菩薩半跏像

市指定有形文化財），木造聖徳太子裸形立像（鎌倉時代・同），木造菩薩坐像（平安時代・京都市登録有形文化財），木造伝嵯峨天皇坐像（南北朝時代・同）などの彫刻が多数安置される[2)]。

本像は，明治時代に廃絶した福正寺（福生寺とも）から移されたと伝わる。『葛野郡寺院明細帳』によれば，明治13年（1880），薬師寺は同じ葛野郡上嵯峨村にある末寺・福生寺を合併した[3)]。本像が「生六道地蔵」と称される所以は，福正寺との関係にある。冥土通いで知られる小野篁は，平生は六道珍皇寺の井戸を入口に冥府へ赴き，生六道と呼ばれる地の井戸から現世に戻っていたという伝説がある。篁は，地獄の亡者のために罪を受ける地蔵尊の姿に感激し，現世に戻り地蔵像を彫刻し，それを祀るために建立したのが福正寺であるという。福正寺について詳細を記す史料を見出すことができなかったが，『山州名跡志　巻之八』には「生六道」の項があり[4)]，また竹村俊則氏は，福正寺の別称を生六道，あるいは生六道と呼ばれる地蔵堂にあった地蔵像が移された付近の寺を福正寺と解説している[5)]。

生六道の伝説は近世史料からも知られ，それを現在まで受け継ぐのが本像である。

2．像の概要

次に，美術院作成の「市指定文化財修理解説書」[6)]を掲載する。

法量（cm）

〈本体〉像高 112.2　坐高 77.3
頂－顎 25.2　面幅 16.1　耳張 20.1
面奥 20.4　臂張 46.9　膝張 63.6
膝高(左) 12.6　(右) 12.5　膝奥 43.1

〈光背〉全高 150.7　輪光径 55.8
輪柄長 97.4　柄高 3.5　柄幅 4.0
柄厚 1.3

〈台座〉全高 54.5　岩高 45.1　框座厚 9.6
框座張 87.8　框座奥 74.8

形状

〈本体〉円頂，白毫相，玉眼，耳朶環状，三道を表わし衲衣の上に袈裟をかけ，左手屈臂して掌を仰ぎ宝珠を執る。右手は右脚上に置き，掌を内にして第１・２指を捻じ，左足を踏み下げて趺坐する。

〈光背〉輪光背柄付き，輪部に火焔付き宝珠３個を配す。全て後補。

〈台座〉岩座，下框一段。全て後補。

品質構造

〈本体〉桧材，寄木造り，彩色（後補）。玉眼水晶製。頭体を通しての根幹部は左右二材を矧ぎ付け，背板を矧ぎ足す。内刳を施し，三道下で割首とする。両肩別材矧付け。両手，両袖先別材矧付け。脚部は横一材製。垂下する左脚は竪木，裳裾廻りは竪横数材を矧ぎ付ける。両足先別材。現状では後補の底板を貼り付ける。

〈光背〉桧材，寄木造り，漆箔（後補）。

〈台座〉桧材，寄木造り，下框黒漆塗り。岩部は自然木組付け（後補）。

損傷状況

〈本体〉

１．各矧目が緩み，あるいは離れ，木質が腐蝕朽損していた。
２．玉眼が緩み，押え木も朽損していた。
３．後補の粗雑な彩色が見苦しかった。
４．地付廻りが朽損し，欠損・割損を伴っ

ていた。又，底板も形状不適合であった。

5．左手第２指，右手第３指欠失。左３・４・５指，右４・５指がそれぞれ後補であった。

〈光背〉接合面が緩み，火焔の一部が欠失し，枘が形状不適合であった。

〈台座〉各矧目が緩みあるいは離れ，岩部が朽損し安定が悪かった。

修理仕様

〈本体〉

1．エキボンガス（臭化メチル・酸化エチレン）を用いて殺虫を行ない，腐蝕朽損部はアクリル樹脂（パラロイドＢ72溶剤トルエン）を用いて硬化した。

2．緩んでいた玉眼は裏紙，押え木を取り替え強固に固定した。

3．後補の彩色は除去し，当初の素地を表わした。

4．形状不適合の底板は撤去し，地付廻り小欠失部は桧材で補った。

5．欠失及び後補の左２・３・４・５指，右３・４・５指を桧材で補足した。

〈光背〉

1．各接合部は一旦解体し，火焔の欠失箇所は桧材で補い，枘は新補し，框上に枘を穿ち，安定を計った。

〈台座〉

1．各矧目は一旦解体し，虫蝕朽損部はアクリル樹脂を用いて硬化した。

2．岩部の上面に像底面に合った板を貼り，像の安定を計った。

以上の修理箇所は全て古色仕上げとし，修理記銘の銅札を台座裏面に打付した。

特記事項

・像内頭部に墨書銘

・背面内刳部に墨書銘があり，共に写真及び籠字を取り記録した。

以上である。後補彩色が取り除かれ，一部に漆箔・彩色・截金の痕跡等が認められたことは，本像の当初の姿を知る重要な手がかりであり，銘記についても，制作背景や伝来を考えるうえで貴重な情報である。

なお，本解説書とともに作成された「修理記録写真」は［図４～20］，「修理図解」は［図21～28］を参照されたい。

３．銘記

銘記は次の通り。旧字体は現行の字体に改めた。

〔頭部内墨書〕[7)]

図２　頭部内墨書　側頭部

図３　頭部内墨書　後頭部

❶～❸（左側頭部）：
大日如来真言（❶法身・❷報身・❸応身）
❹・❺（左後頭部）：地蔵菩薩真言
①～③（右後頭部）：
光明真言（キリークは欠く）
④～⑦（右側頭部）：大随求菩薩真言
〔像内背面墨書〕
此像者求仏房造立
不知何年月而破損之所
建長八年丙辰五月日
奉修復之仏子照空敬白
仏 師 日 尊 □
〔像内正面墨書〕
南無三宝大荒神
今度奉地蔵并御堂依及大破
本尊御堂修復再興者也然ハ六
道者自薬師寺被存知所也亦薬
師寺者拙僧相拘之間如此令修造者也
沙　先功徳院
慶長十二丁未年五月吉辰
門　当薬師寺也
性慶（花押）
奉仏師者下野国日光山麓西方
般若寺住僧楚椿修営者也
〔宝珠台裏墨書〕
小野篁
□
□
□□□

以上，頭部内全面に梵字が配され，像内背面（背板部分）に建長８年（1256），正面に慶長12年（1607）の修理銘，宝珠台裏には「小野篁」などと読める文字がわずかに認められるが，判読は難しい。建長８年の修理銘は，本像を求仏房なる人物が造立し，いつの年か知らず破損し，建長８年に仏師日尊・仏子照空が修復したことが記される。

本像は，全体的に穏やかな彫法でまとめられ，鎌倉時代時代前半の保守的な仏師の手になるもので，壬生寺式地蔵の一例として貴重なものであると指定時に評価されている[8]。この修理銘は，像が建長８年以前に造立され，長い時間を経ずに破損，修復されたことを想像させる。また，求仏房・日尊・照空などの人名が記されるが，照空については，建長元年（1249）に仏師法眼康円により造立された，ケルン東アジア美術館所蔵の地蔵菩薩像の納入品のうち，短冊形摺仏紙背の結縁交名に同一名が見えることが指摘されている[9]。建長８年銘も同様，慶長12年の修理銘は，面を削ったか，墨書一帯は他と木色が異なる。内容は本尊である地蔵とその御堂が大破し，修復再興するというもので，薬師寺の性慶が施主となり，下野国日光山麓西方の般若寺の僧・楚椿が仏師を務め修営したとある。ここからは，本像がすでにこの頃から薬師寺との関わりがあったことが窺われる。

おわりに

以上，嵯峨・薬師寺の木造地蔵菩薩半跏像について紹介した。本像への理解・研究がより深まるとともに，引き続き保全が図られることへの一助となることを願う。

山下（やました）　絵美（えみ）（文化財保護課　文化財保護技師（美術工芸品担当））

註

1）本尊の薬師如来像は，『葛野郡寺院明細帳』（明治16年度，京都府立京都学・歴彩館デジタルアーカイブ）記載の寺伝によれば，弘仁９年（818）の疫病流行時，嵯峨天皇が平癒を祈願して弘法大師に彫刻させたものであり，「療病院薬師」と公称され，このとき建立されたのが薬師寺であるとする。なお，正徳元年（1711）刊行の『山州名跡志　巻之八』（新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書』第15巻，昭和51年再版）には，「療病院」の項に同薬師如来像の伝説が記される。薬師寺と「療病院」については，竹村俊則『昭和京都名所図会』（駸々堂出版，昭和58年）「薬師寺」の項で，「当寺を一に〈療病院〉と称する」としている。

2）薬師寺には木造地蔵菩薩半跏像を含め，５躯の指定・登録文化財が所在する（全て昭和60年６月１日付告示）。

3）註１

4）『山州名跡志　巻之八』（註１）には，「療病院」の次項に「生六道」がある。生六道は療病院から一町余りにある南向きの小堂で，小野篁制作の二尺ばかりの地蔵菩薩立像を本尊とするとある。

5）竹村俊則『昭和京都名所図会』（註１）・同『京のお地蔵さん』（京都新聞社，平成６年）

6）本稿掲載の「市指定文化財修理解説書」・「修理記録写真」・「修理図解」は，本事業の記録として，財団法人美術院（当時）が作成した。

7）梵字の解読については，平野寿則氏（大谷大学）にご指導いただいた。

8）京都市文化観光局文化財保護課編・発行『京都市の文化財－京都市指定・登録文化財第三集』（昭和61年）

9）同像納入品に見える同一名については，奥健夫氏よりご教示いただいた。奥健夫『仏教彫像の制作と受容－平安時代を中心に－』第５章５節「ケルン東洋美術館の地蔵菩薩像」（中央公論美術出版，令和元年），同「源信造立の地蔵菩薩像に関する新資料」（佛教藝術學會編『佛教藝術』269号，毎日新聞社，平成15年），『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇　第６巻（中央公論美術出版，平成20年）

参考文献

・ホームページ「京都・嵯峨　薬師寺」
http://yotsuba.saiin.net/~saga/yakusiji/index.html

・梅原孟「地霊鎮魂　京都ものがたり」第９回「篁と地蔵と薬師寺」（読売新聞，平成６年７月31日）

図版提供

［図１］筆者撮影

［図２・３］現・公益財団法人美術院撮影・提供，筆者編集。

［図４～28］現・公益財団法人美術院撮影・提供。

附記

本稿執筆にあたり，薬師寺・安藤靖高氏，修理記録をご提供いただきました公益財団法人美術院には多大なるご指導・ご協力をたまわりました。末筆ながら記して御礼を申し上げます。

修理記録写真

図４　修理後　正面（胸飾・持物・光背・台座なし）

図５　修理前　正面

図６　修理後　正面

図７　修修理前　左側面

図８　修理後　左側面

図９　修理前　背面

図10　修理後　背面

図11　修理前　右側面

図12　修理後　右側面

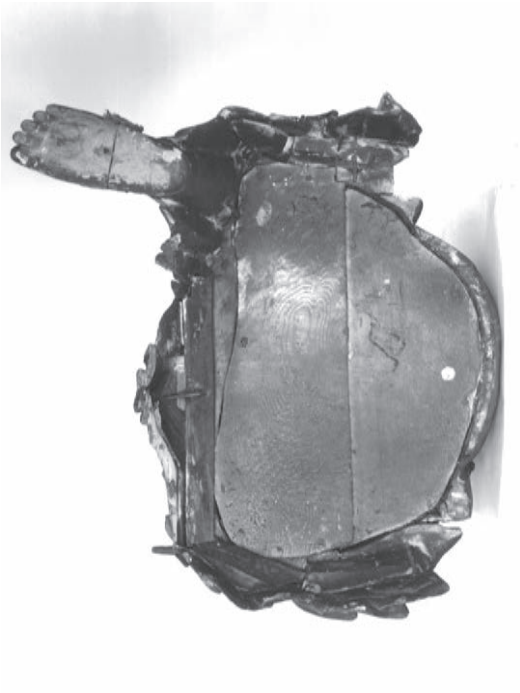

図13　修理前　像底

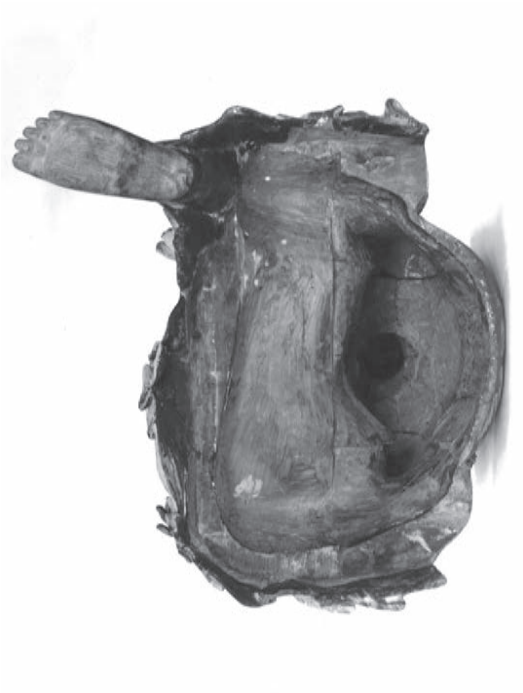

図14　修理後　像底

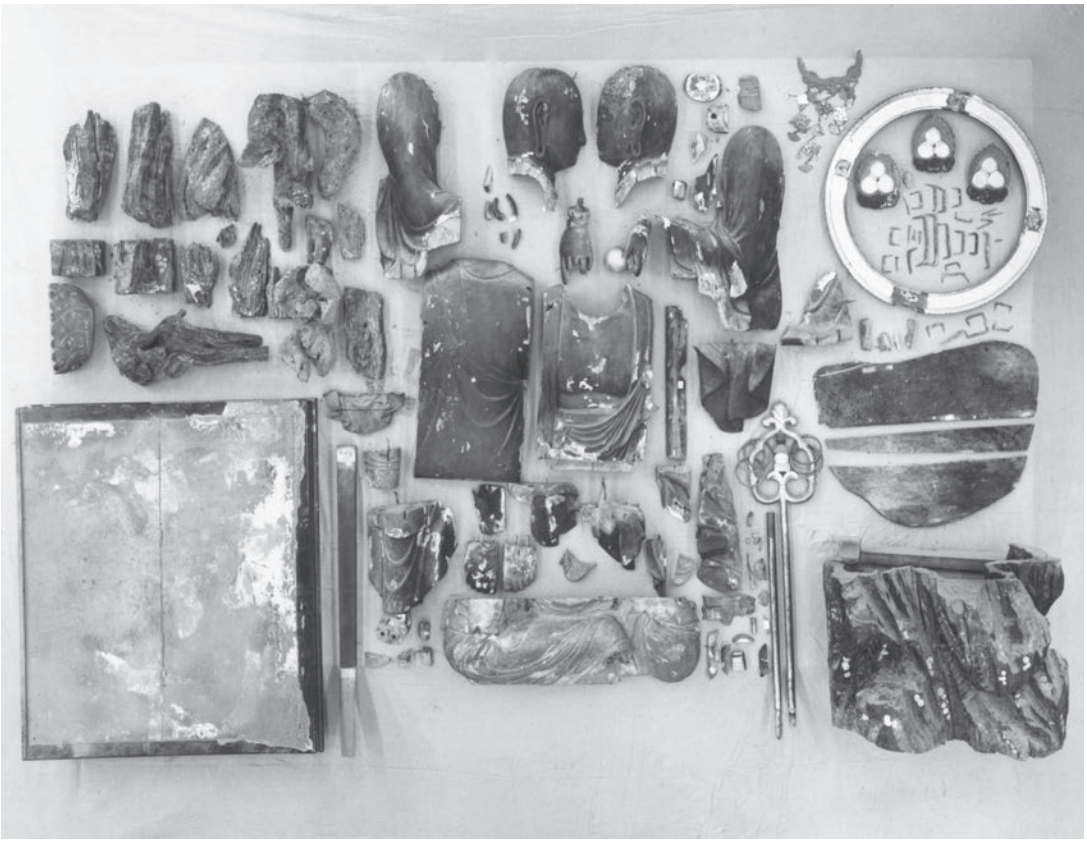

図15　解体

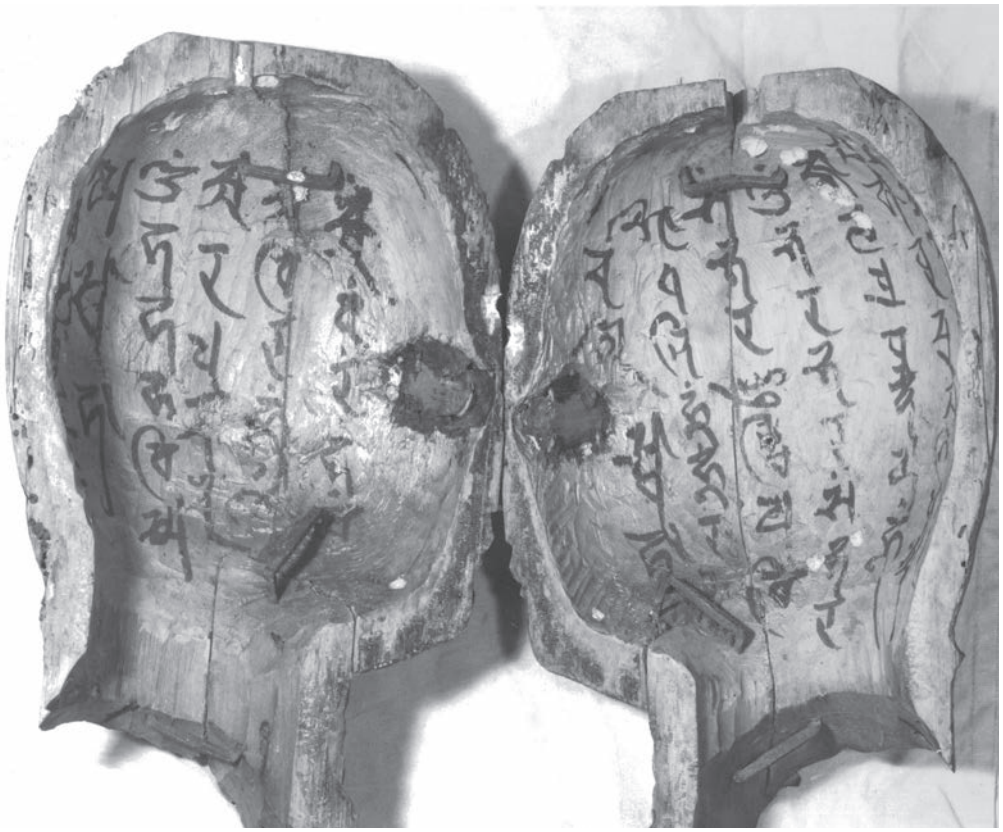

図16　頭部内墨書

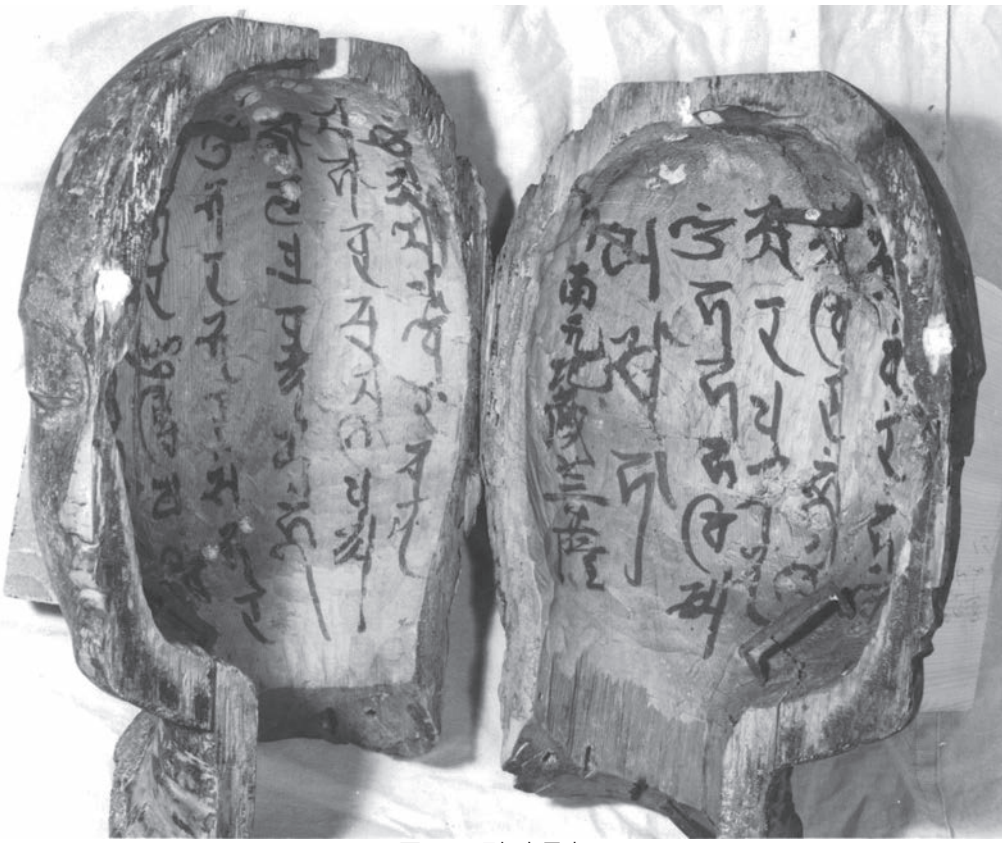

図17　頭部内墨書

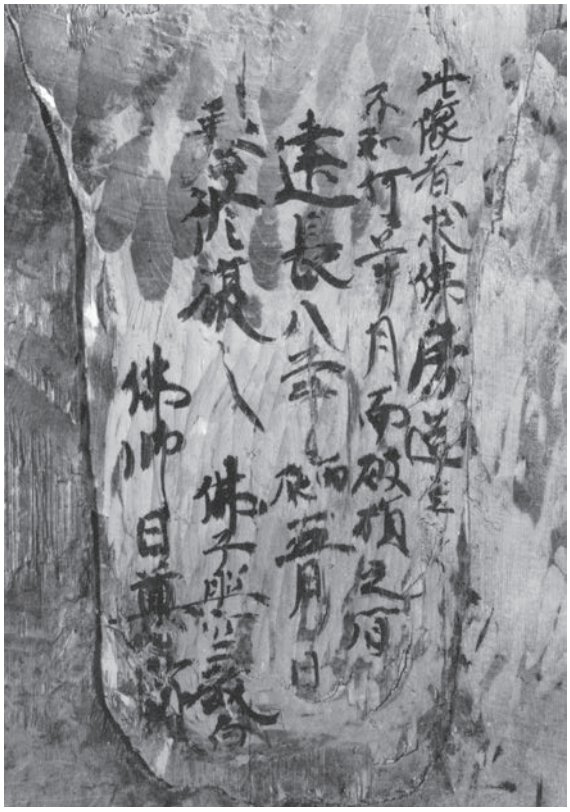

図18　墨書　像内背面

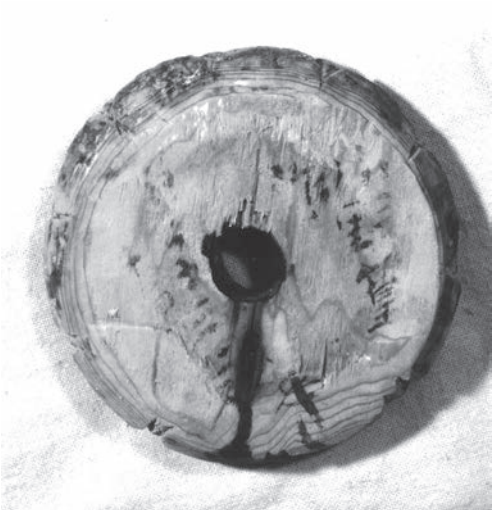

図20　墨書　宝珠台裏

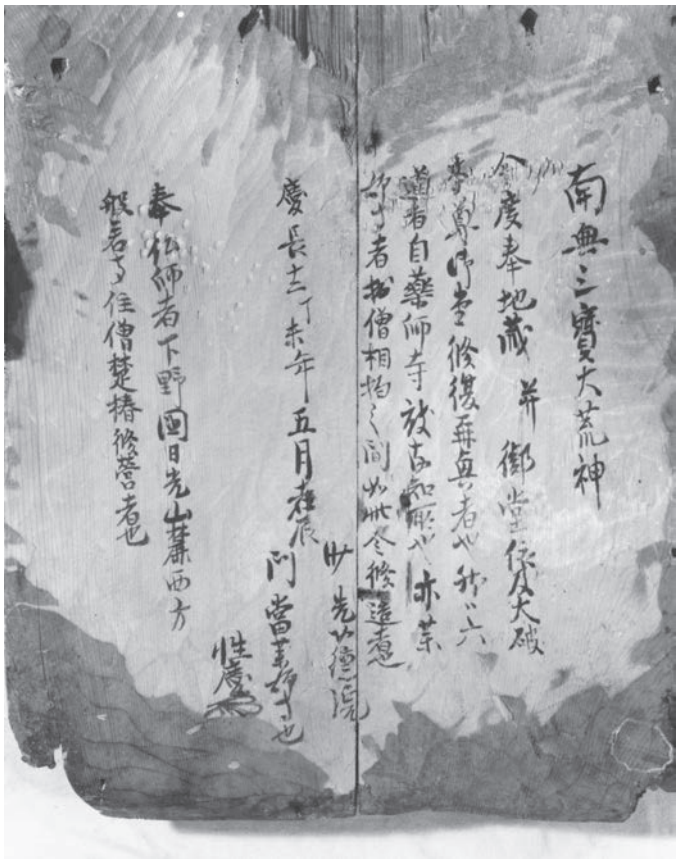

図19　墨書　像内正面

修理図解　※赤斜線は修理，青斜線は新補を示す。

図21　修理図解　正面

図22　修理図解　背面

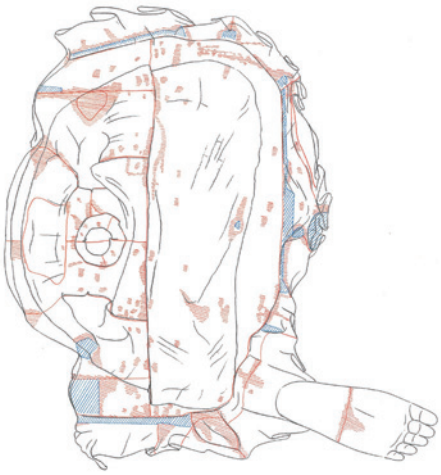

図23　修理図解　像底

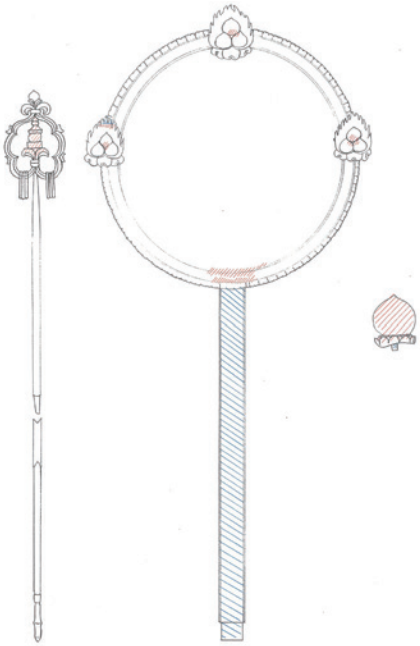

図24　修理図解　光背

銘記（籠字）

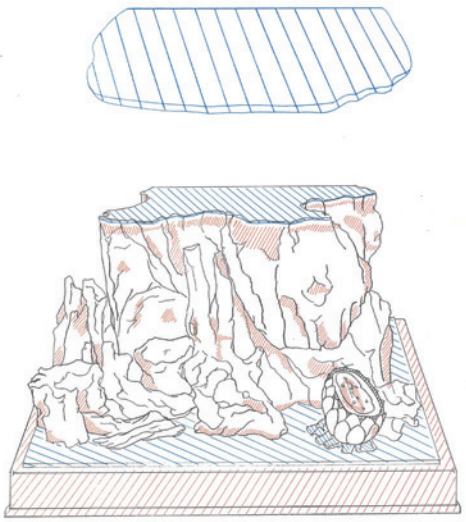

図25　修理図解　台座

図26　銘文（籠字）　頭部内　左側

図27　銘文（籠字）　頭部内　右側

図28　銘文（籠字）　像内背面